

## 男の棲家

藤田 愛子

四階の中央にある四〇二号室の石原の部屋は、月五十万の家賃である。一年を加算すると六百万になる。独身の男が住むには贅沢すぎやしないだろうか。それより月五十万のローンを組めば立派な一軒家を買える。しかし四十歳で独身の彼には、都心のマンションは何かと便利だし、白金台という土地柄、高級マンションというだけで商売をしている石原には、それなりの価値とプラスアルファがあるのかも知れない。

土曜日の夜にはかならず若い体格のよい男が訪れる。客用の駐車場を借りるには前もって管理人の許可がある。石原はその許可をとりにきたことがない。管理人の妻千恵が若い男の赤い車にシールを貼ると、翌日石原がきまつて血相を変えて現れる。

「どうして客の車にシールを貼るのです？」

「無断駐車には貼ることになってるんです」

「貼る前に僕に注意すればいいじゃないですか。今後僕の客の車にシールを貼るのはやめて欲しい！」

男としては小柄な石原が牙をむきだしにしている。その剣幕に千恵はたじろいだ。そして毎週現れる若い男の赤い車にはシールを貼らないで見逃した。

それから二週間経った或る日、広い玄関ホールに四〇二号室の石原が立っていた。

「明日ガラス掃除がくるそうですね。生憎いなので、鍵あずかってくれますか。掃除のあいだ見て欲しいのです」  
剥きだした牙が、また元の穏やかな貌に変わっていた。  
「ええ、おあずかりします」

管理人の妻の千恵もさりげなく応えた。赤い車に貼紙をしないかぎり四〇二号室の石原の心は平穏なのだろう。千恵も規約を楯にしてシールを貼るのはやめていた。

その日、ガラス拭きの若者が二人シャンパンブラザにやって来た。

四〇一号室の掃除が終わると千恵は、石原からあずかった鍵をもって自ら四〇二号室の扉を開けた。いまべールのなかに閉ざされた石原の生活が現れようとしていた。若者たちは手馴れたもので、リビングの窓をさっと開き、ガラス窓に沿って溶液のついたハケを伸ばしてゆく。

豪華なヨーロッパ家具が並んでいる。それらの家具の配色やスタンドの採光にも、すみずみまで石原のセンスが光っていた。千恵は、ガラス拭きの仕事振りを見るのも忘れ、四〇二号室の華やかさに見惚れていた。

オランダ製の丸いテーブルで土曜の夜は、赤い車で通ってくるがっしりした体型の男と石原は睦まじく食事をするのだからか。肉とサラダを口に運びオレンジを二つに切って分けあい、まるで陽光にとりかこまれていようようにお互いを覗めあう。

気がつくくと、若者たちは次の寝室のガラス窓を磨いていた。グランドピアノの蓋は開けたままになっている。シヨパンのスケルトン第一番の楽譜。東大出の石原はそれを弾きこなすテクニクを持っている。

いよいよ求めあう目的にむかって世界が展ける。すべてが体格の良い若い男のために用意されている。特注した大きなダブルベッドも、ようやく辿りつくかれらの儀式のためにある。腕たてふせも、嘘八百で固められたあの甘い言葉も、違う性に対する一時的な賛美もいらぬ。セックスという担保で、生涯になわなければならぬ義務も存在しない。本能に色どられた男女の行為なんてたかがしれている。二人は償いのいらぬ男同士の肉の饗宴にのめりこむ角刈りの頭のたくましい背中に凭れながら精緻なひきしまった接合に石原はあえぎにあえぐだろう。歓喜の声をふるわせると二人は疲れはててベッドに横たわる。やがて男達は体位をかえて交わるものの、もはや凝固した感覚の虜となっている。それらの行為はあくまでもグランドピアノで彼が弾いた、シヨパンのスケルトンの延長線上で繰り返りひろ

げられていた。

四〇二号室の光の中で千恵は我を忘れて佇んでいた。「終わりました。次の部屋に行きます」ガラス拭きの若者が、千恵にそう言った。

寝室のサッシのガラスはびかびかに光り、隣の企業の男子寮の樹木を写しだしている。部屋はふたたび沈黙の壁に囲まれ、グランドピアノとダブルベッドが、しらけたように居坐っていた。

——霧のなかに包まれた二人の男の姿が視えてきた。若い男のたくましい腰に手をあてがっている貴方の姿が、夢想のなかでいま展けた世界を、誰にも告げてはならないと千恵は心に誓っていた。